

第四の道について

宮内久光

(一)

神の存在証明が志向するのは神そのものではなく、此岸に於ける神の跡、印の保証 (le témoignage de Dieu contenu dans ses vestiges, ses signes d'ici-bas) を探り明らかにすることであると言われる。⁽¹⁾ 聖トマスが自らの証明を「道」と呼んだのはその故である。神の存在 (actus essendi) は決して明らかにされず、わずかに神の存在 (Deus est) の肯定に我々は辿り到らねばならないのであるから。⁽²⁾ 神の存在証明に対するかかる慎しい態度はア・プリオリな論証である本体論的証明の否定と対応する。⁽³⁾ 従って運動による道が第一に置かれたのは、神への上昇の支点として求められた感覚的事物に於て運動こそが我々にとって最も容易に捕捉される事実であるからであり、第一の道はその厳密性によってではなく、認識の人間の形式に最もよく合致していることによって他の道に優先するのである。しかしながら本体論的証明は quia に留らず、propter quid をも与えんとするその意図に於て頗る野心的であり、大きな利点を有している。何故ならば運動の第一原因は単にそれであるに過ぎないが、我々がそれを神と名付ける時神の完全性に就て何等かの観念が前提されねばならないからである。従って神の認識には、それが論理的概念的に発展する以前に不可避的に自然的原初的直観が先行する。即ち、我々と諸事物の存在の根本的偶然性 (être-avec-néant) の直観が、我々を無から独立した存在 (Etre-sans-néant) の直観に導く。⁽⁴⁾ このことは神の存在証明が、かかる原初的直観に還元可能か否かの問題を示唆する。第一から第三の道に共通して見出される

二つの契機、因果系列の措定と、その無限遡行の否定は、因果系列の措定が正に因果系列そのものの要求に応じてその無限遡行の可能性を否定する故に、唯一つの上昇過程に還元される。運動の事実が因果系列によって説明さるべきであるならば、系列の頂点に第一原因が前提されねばならないからである。即ち、因果系列の措定は必然的に第一原因を定立する。更に因果系列に於ける二次的原因は第一原因と感覺的現実世界との媒介としてその本来の意味に於ける原因性が否定される故に、感覺的現実世界は第一原因に直接結合せしめられる。従って因果律による第一から第三の証明は第一原因に感覺的現実世界を説明すべく帰せられた性格によって規定される。即ち神の存在証明の根拠は出発点としての現実世界の根本的偶然性、すべての存在が変化と消滅の可能性を常に有するという根本的偶然性の中に、かかる現実世界を支える必然的存在を要請する心的態度によって決定づけられる。換言すれば、聖トマスの試みた証明は出発点に於ける直観の確實性にのみ依存しているといふことができる。論証を第一原理に還元しようとする努力もこのことを意味するに他ならない。⁽⁵⁾その意味に於て、運動がその一様態に過ぎぬ存在そのものの原因を辿る第二の道は確かにその絶対的普遍性によって第一の道の完成ではあるが、かかる直観の論理的展開としての第三の道こそ最も根本的であり、第一、第二の道と並列的に考えられるべきではなく、それらの基礎になるものである。かくして本来的な意味に於ける因果系列にはよらないで、諸存在の階層 (gradus) を基礎として直接神の存在を導出する第四の道が新たな光の下に現れてくる。

(二)

第四の道は事物の中に見出される完全性の階層を経て絶対者に至る過程である。——善、真、高貴その他この種の完全性には階層がある。しかるにより多いより少ない (magis et minus) は最も多く (maxime) あるものに様々に近接するに従って言われる。それ故に最も真なるもの、善なる

ものがなければならない。そして最も真なるものは又最高度に存在である故に、すべての存在にとって存在、善、各完全性の原因である或るものが存在する。⁽⁶⁾——しかしながら「より多いより少ないは最も多いものとの関係に於て言われる」という命題は普遍的に妥当しない。聖トマスがここで例に挙げた熱の高低は最も熱いもの「火」との関係に於てではなく、熱の一定の単位との関係に於て言われるからである。⁽⁷⁾即ち此处では同一類に於ける完全性の階層と因果性が扱われているのではない。⁽⁸⁾相対的な類を超えた所に上昇過程の基礎は求められねばならない。第一の道に於て運動の第一原因が運動の充実としての運動そのものではなく、運動の否定、不動なるもの (*omnino non motus*) としてのみ与えられるということに注意せねばならない。そのことは運動が少なくとも目的への関連に於ける欠除によって不完全なものであるという前提に制約されて居り、⁽⁹⁾運動が完結的秩序ではないこと、⁽¹⁰⁾即ち自らの秩序の中に充足的根拠を持たないということの意味する。従って運動の第一原因は同一平面に展開される時間的因果性を超えた所に求められねばならない故に必然的に運動の秩序を超えはするが、その規定は否定的にしか与えられない。運動の第一原因としての純粹現実態は単に純粹な運動否定を表す。かくして否定的ではなく積極的完全性の充実としての絶対者に至る道の基礎は相対的ではない所の、類を超えた完全性に求められねばならない。従って、類を超えて一切に普遍的であるか、或は絶対的な、即ち何等の不完全をも含まない階層的完全性から一挙にその全き充実としての神の存在に到ろうとする第四の道は正にかかる要求に應ずるものであると考えられる。ens 並びに *proprietas transcendentales* は一切に於ける絶対的内在と普遍性によって、生命、認識はその意味に於ける様態を含まないことによって、絶対者に至る出発点として相応しい。⁽¹¹⁾

さて完全性に階層を認めることは、同一完全性に不等性と多性の存在を認めることである。そのことは制限と充実、相対的完全性乃至不完全性と絶対的完全性の対立を意味する。そして聖トマスは両者の因果的結合を分

有の関係として把握する⁽¹²⁾。或る完全性そのものではない所のものは、その完全性を分有的に所有するのであり、従って自らの根拠に基いてそのものであるのではない⁽¹³⁾。此処に第四の道を制限から充実への上昇過程として考察する可能性が拓けてくる。

(三)

(a) 第四の道は完全性の階層即ち *magis et minus* を我々に認識せしめる内的基準から出発している故に、内的基準の实在検証に依存する。かくて我々は先ず無限者を基準として認識することによってのみ制限されたものを認識できる。換言すれば、制限をそれ自体として認識していることは我々が既に神を認識していることを証明する。即ち認識の妥当性の証明が神の存在証明⁽¹⁴⁾である。

此処では存在と真理の可換性に基いて、判断の妥当性によって観念的秩序から实在へ向う⁽¹⁵⁾。事物に於て見出される階層が観念的秩序に属する限りこの過程では *maxime verum* は前提されていることになる。

(b) 制限されたものとは或る可能的完全性を、それが他によって所有されるか否かに拘らず排除するものを意味する。即ち或る完全性を欠いているものを示す。かかる制限が実在的であることは存在に於ける階位性、多性、可変性によって自明である故に、制限が第四の道の確実な基礎となる⁽¹⁶⁾。制限されている存在が欠いている完全性は、それが欠いているということによって必然的に *realis* であり、従って制限は実在的完全性の排除である。所で制限された存在によって包含されるものも、排除されるものも共に含めた可能的完全性の全体は無限である。若し無限でなく制限されているとすれば、現実化されてはいないにしても少くとも可能的な、それ以上の完全性を排除することになるであろうから。そして可能的完全性の全体は唯一の単純な完全性に於てのみ可能である。無限性は多と矛盾し、混合乃至合成はそれ自体制限を意味するから。それ故に唯一の単純で無限な完全性が、制限された存在の可能性の条件として現実に実在する。単に可能

的な無限の完全性はその可能性、従って又完全性そのものの *fundamentum* に依存する故に、*fundamentum* が有する *independentia* という完全性を欠くことになるからである。⁽¹⁷⁾

第四の道を範型因のみによって理解しようとする此の立場では、動力因への還元という一般的な過程を経ず諸存在に於ける完全性の制限からその成立条件として無限的完全性の実在を主張する。しかしながら無限的完全性の可能性を問う時、「神は可能であるならば実在する」という自然神学的テーゼが前提されている。⁽¹⁸⁾

上述の証明は結局相対的に完全な存在と、絶対的に完全な存在とを典型的因果性によって結合することに存する。もし絶対的完全性が実在すると仮定すれば、それと区別される一切の存在は必然的に不完全なものと規定される。しかしながら不完全な諸存在から絶対的完全性の観念は純粹に内的な光によるのでないならば、何処から導出され得るであろうか。何故ならば此処では不完全性は絶対的な意味に取られ、経験によって充満的には与えられていない所与、即ち *ens* そのものによってその不完全性は測られているからである。従って諸存在の不完全性を確認する為には絶対的完全性の認識を予め所有することが不可欠である。完全性によってのみ不完全性は明らかにされるのであるから。しかしながら我々の認識が不完全な諸存在に出发点を置く限り、絶対的完全性は我々に知られていない筈である。即ち不完全な存在の概念から絶対的に完全な存在の概念を導出する過程には悪循環が必然的に伴う。何故ならば完全な存在の概念は不完全な存在の概念より前にあると同時に後にあらねばならないからである。このジレンマから脱する為には内的照明による経験から独立した最も完全なるものの生得観念を認めるか、或は不完全性から完全性への移行という過程に、我々の思惟の先天的制約を見ないで、それ無しには我々の思惟が無に帰する所の存在そのものの先天的制約を認めるかしなければならぬ。⁽¹⁹⁾ 前者を否定して後者を認容することは即ち、神の存在証明が同一律の直観に

於て既に決定されていることを意味する。

(四)

Geigerは聖トマスの体系に於ける分有を、*participation par composition* と *participation par similitude ou limitation formelle* の二つに分類し、それぞれに上昇過程が対応することを示した。⁽²⁰⁾ 此処ではこの分類による上昇過程を第四の道との関連に於て考察する。

(a) 先ず第四の道の基礎である完全性の階層は合成 (*compositio*) によって説明される。同一完全性の不等性、即ち制限と不完全性は合成の結果と⁽²¹⁾考えられるからである。換言すれば、或る完全性そのものでないものは、その完全性を部分的に、即ち分有として所有する故に必然的に合成体である。そこで *compositio* から *simplex* へという過程が成立する。即ち或る存在が分有によってのみそれである所の完全性、つまり基体と完全には一致しない *attributum* は、自らの根拠に基いてその基体に帰属せしめられるのではない故に、その原因として、本質的にその完全性そのものである所の存在を必然的に定立する。すべての合成体の *esse* はその要素 (*componentia*) に依存する故に、⁽²²⁾ 絶対的意味に於てそれ自らによる存在、第一の存在ではあり得ない。⁽²³⁾ 即ち合成体は原因を有する。⁽²⁴⁾ そして合成体が *ens completum* であるためには諸要素は現実態—可能態という構造を必然的に有し、⁽²⁵⁾ 可能態は制限の原理である。

かくて諸存在に於ける *esse* の分有は、その原因として、純粹現実態である *Ipsium suum esse* を必然的に定立する。⁽²⁶⁾

聖トマスがアヴィチェンナのものとして伝えるこの過程は諸存在に見出される現実態—可能態の構造、即ち質料乃至基体と形相、実体と偶有、本質と存在等々の合成によって諸存在の不完全性、或は制限を説明し、そこからその原因としての純粹現実態を導出する。しかしながら此処では合成による制限は、無限存在と、それ自体による単純存在との同一性から演繹

されている⁽²⁷⁾。従って再び合成から単純存在への移行の妥当性が問われなければならないであろう。Ipsum esse subsistens との対比に於ては爾余の一⁽²⁸⁾切の esse は必然的に合成によって制限されることになるからである。

更に合成から単純体への過程は esse の一義性を必然的な基礎とする。何故ならば esse によって類似している諸存在に於て、それ等相互を区別する原理と、それによって相互が類似する原理 (esse) の合成を先ず認め、次で純粹状態に於ける ipsum esse subsistens を考察する故に、この過程は多様性の原理に元来関ることなく、その結果必然的に esse の一義的類似性⁽²⁹⁾に基礎を置くことになるのである。

諸存在の制限を合成に見る立場では、現実態としての分有されたもの (participatum)、形相的秩序に於ける不完全性、多性の起源が専ら考察され、多様性の原理である可能態としての分有するもの (participans) に就ては何も語らないのが特質である。従ってかかる上昇過程は esse の一義性によって最も空虚で無規定な抽象体、ipsum esse の分有に還元されることになる。しかも制限が合成によって説明される限り、基体は必然的に前提されねばならない。即ち一切の制限はそれを説明する基体を要し、その結果相互に制約する基体の無限の系列が要求されることになる。かくしてそれ自体全く無規定で無差別な永遠的制限の原理、究極的基体としての第一⁽³⁰⁾質料の存在が、世界の永遠性の主張を伴って容認されねばならない。

それ故に合成から純粹自存性への過程は、両者の対立に於て、純粹充実性が絶対的自存性を保証する限り、完全性の制限は必然的に基体との合成⁽³¹⁾を含まねばならないという前提に依存する。

プラトンに帰せられる多から一への過程も同様の性格を有する。此処では多の一に対する依存性が前提され、esse に直接的に適用される。従って諸存在に於ける esse の区別の原理が語られない限り、esse は一義的抽象⁽³²⁾的に理解され上述の諸困難を免れ得ないのである。

(b) 合成に於ける基体の必然的前提は、基体そのものの理拠によって、

分有を偶有的内在としてのみ規定する。諸実体に於ける善 (bonum) が善そのものでないならば、分有によって善であると言われねばならないが、その時には実体的に善であるとは言われ得ないことになる。若し諸実体が実体的善でないならば、諸実体は存在することに於て如何に善であるのか。⁽³³⁾

偶有的内在を意味する合成による分有のみを認めるボエチウスが提出したこの問題に対して聖トマスは分有が同一形相の完全性の度合の間の似同性 (similitudo) の関係としても考え得ることを示した。⁽³⁴⁾ 従って此处では基体と形相との関係を部分として考察するのではなく、或る下位の階層に於てある完全性から、より上位の或は絶対的階層に於ける完全性へと向うのである。しかしながら完全性に於ける一切の制限が合成を含むとすれば、制限はいかに理解すべきであろうか。正にこの故にこそ第四の道の基礎は実在の根本的構造を示す *transcendentalia* と絶対的意味で言われる完全性に求められるのであるが、⁽³⁵⁾ 此の場合には感覺的現実世界の力動的な内実が静的な形相的關係に還元されることにより、因果性は著しく弱められ、諸存在の制限に不可避免的に伴う合成の事実を説明し得ないという新たな困難が生ずる。

聖トマスは先ず自然の中に形相的似同性の階層を見出す。⁽³⁶⁾ 所で存在の完全性に於ける形相的階層は作用に於ける形相的階層に対応する。⁽³⁷⁾ 作用はその力が高いだけ一層多くを統一的に自らの中に包摂する。⁽³⁸⁾ かかる階層性が絶対的意味で言われる完全性としての生命や認識に見出されるのは事実である。⁽³⁹⁾ しかし完全性の階層が、かかる形相的關係として理解される限り因果的依存性は見出され得ない。聖トマスは人間の魂より上位の *intellectus* の存在を確立しようとするが、分有的存在から本質的存在、*mobile* から *immobile*, *imperfectum* から *perfectum* への移行は必然的なものとして前提されている。⁽⁴⁰⁾ そして *ratio* の *intellectus* に対する不完全性は *ratio* の認識が *discursus et motus* を伴う限り *intelligentia* の秩序に於て下位の階層にあることに帰せられるが、その原因は *ratio* が魂の部分であり、魂が

身体に結合していることに求めざるを得ないのである。⁽⁴¹⁾

(五)

上述のような諸困難を含む第四の道を支えるものは何であろうか。何よりも先ず存在に於ける階層性が神学的綜合の役割を担うものであることを指摘しなければならない。上位の完全性は下位の完全性を包摂し、上位の完全性の最低段階は下位の完全性の最高段階と接合する、⁽⁴²⁾という密着した階層的秩序の観念は、その秩序に於ける第一のものに原因性を認めない限り⁽⁴³⁾完結しない。

かかる宇宙体系は明らかに「すべての原因は自己と類似の結果を生み出す」(Omne agens agit sibi simile) というネオ・プラトンの原理を根拠としている。似同性 (similitudo) の関係に因果性を附与することを可能にするのはこの原理である。⁽⁴⁴⁾類比的認識も、神へ至る因果性、否定、優越的肯定 (causalitas, remotio, eminentia) の三つの過程も此の原理無しには⁽⁴⁵⁾理解できない。

更に、存在の多様性こそ人間的認識の第一の所与であるが、存在の真に根本的な多様性の原理が永遠不動の本質に於て与えられているトマスの存在論の性格も第四の道を規定していると言わねばならない。完全性の階層に示される多様性も正に形相的本質の多様性に還元されるが、本質が時間的空間的制約を脱して⁽⁴⁶⁾居り、個別的存在が存在として意味を有つのは正に此の絶対的本質との関係に於てである限り、本質は永遠的なものと規定される。そして本質は esse に対して可能態にありながら、その可能態は個別的存在への可能態であり、その観念には creatus ということが含まれない限り、本質は神的知性にその源を求めねばならない。似同的關係に於ける因果性を認めることは、一切の完全性の全き充実である神の永遠的な印⁽⁴⁷⁾を形相的完全性の中に見ることである。真理に永遠性を見出す時、既に永遠真理に拠る神の存在証明は完成している。同様に第六の道は intellectus

supra tempus の直観に於て決定されている。⁽⁴⁸⁾かくして神に至る道は決して純粹に論理的な道ではあり得ない。そして神の存在証明の論理的性格を図式的に見るならば、その推論は単なる叙述の形式に過ぎず、論証の一切は大前提の直観に於て決定されている。⁽⁴⁹⁾“Illud quod est per alterum reducitur sicut in causam ad illud quod est per se.”⁽⁵⁰⁾“Omne quod dicitur secundum quid originatur ab eo quod est simpliciter.”⁽⁵¹⁾“Omne imperfectum a perfecto trahit originem.”⁽⁵²⁾之等の命題が我々の直観の内容を指示する。

従って第四の道に於ては体系構造の下降の形態が上昇の形態に先行するのであり、その限り、神の存在証明は一応体系構造の出発点に置かれながらも、全体系が其の上に築かれる基礎としてあるのではなく、却って存在の全体系を背後に予定するのである。その為には第四の道の充全的理解は存在論の主要問題、perfectio, transcendentalia, 及び両者の関係、就中分有の理論の諸問題の立入った考究の結果として与えられねばならないのである。 (此の小論は昭和33年11月中世哲学会に於ける発表に手を加えたものである)

註

- (1) J. Maritain ; *Approches de Dieu* , p.20
- (2) Pot., q.7, a.2 ad1 : *Summ. theol.*, 1a, q.3, a.4 ad 2
- (3) 本体論的証明の批判については Garrigou-Lagrange : *God ; His Existence and His Nature*, vol. I pp.67—9 を参照。聖トマス自身の批判は *Summ. theol.*, 1a, q.2, a.1 : *I Cont. Gent.*, c.11 を参照。ア・ブリオリな論証一般の批判は *Summ. theol.*, 1a, q.88, a.3 を参照。
- (4) J. Maritain, *op. cit.*, p.9
- (5) Garrigou-Lagrange, *op. cit.*, pp.208—238
- (6) *Summ. theol.*, 1a, q.2, a.3
- (7) F. van Steenberghen : *Ontologie*, 1952, pp161—2 を参照
- (8) 類における因果性に関しては *II. Sent.*, d.1, q.1, a.2 : *I Cont. gent.*, c. 42 : Pot., q.6, a.6 を参照。
- (9) *Summ. theol.*, 1a, q.9, a.1 et 2 : Pot., q.5, a.5 : *Motus enim, ex ipsa sui ratione, repugnat ne possit poni finis, eo quod motus est in aliud tendens ; unde non habet rationem finis sed magis ejus quod est ad finem. Cui etiam attestatur quod est actus imperfectus,……Finis autem est ultima perfectio.*
- (10) *III, Cont. Gent. c. 23 : Impossibile est igitur quod natura intendat motum*

propter seipsum. Intendit igitur quietem per motum, quae se habet ad motum sicut unum ad multa.

- (11) Summ. theol., 1a, q.13, a.3 ad1 : Quaedam vero nomina significant ipsas perfectiones absolute, absque hoc quod aliquis modus participandi claudatur in eorum significatione, ut ens, bonum, vivens et huiusmodi : ……
- (12) Pot., q.3, a.5 : Cum aliquid iuvenitur a pluribus diversimode participatum oportet quod ab eo in quo perfectissime invenitur, attribuatur illis in quibus imperfectius invenitur.
- (13) ibid. loc. cit. : Si unicuique eorum ex se ipso illud conveniret, non esset ratio cur perfectius in uno quam in alio inveniretur. II Cont. Gent., c. 15 : Quod per essentiam dicitur, est causa omnium quae per participationem dicuntur.
- (14) G. Isaye : La théorie de la mesure, 1940. 但し Arthur Little : The Platonic heritage of thomism, 1949 pp.76—77に拠る。
- (15) I Cont. Gent., c. 13……ea quae sunt maxima vera, sunt maxima entia……ostendit (Aristoteles) esse aliquid maxime verum, ex hoc quod videmus duorum falsorum unum altero esse magis falsum, unde oportet ut alterum sit etiam altero verius ; hoc autem est secundum approximationem ad id quod est simpliciter et maxime verum. Ex quibus concludi potest ulterius esse aliquid quod est maxime ens. Et hoc dicimus Deum. Summ. theol., 1a, q.2, a.3 及び Pot., q.3, a.5 では明らかに ignis の例によって実在の秩序であることを示す。しかし、この例は前述のように適當ではない。
- (16) 階位に性については Summ. theol., loc. cit., Pot., loc. cit. 多性に関しては Summ. theol., 1a, q.11, a.3 可変性については I, Cont. Gent., c.13 を参照。
- (17) A. Little, op. cit., pp.100—118
- (18) ibid., p.109, 結局この解釈は聖トマスの否定する apriorism に帰一する。I Cont. Gent., c.11 ; Garrigou-Lagrange, op. cit., p.69 を参照。
- (19) L.-B. Geiger : La participation dans la philosophie de St. Thomas d' Aquin, 1953, pp.353—4, note 1 を参照。従って思考の法則の領域と存在の領域との完全な一致の主張と、第一原理の超越的適用の妥当性の主張が、トマスの神の存在証明の中心問題となる。この点に就ては J. Maritain, op. cit., pp.30—31 ; Garrigou-Lagrange, op. cit. pp. 208—238 を参照。intellectus は不可謬であり、ratio の確実性は intellectus から来るというトマスの intellectualism が此処では決定的な役割を担うことになる。intellectus と ratio との関係に就ては Ver., q. 10, a.1 : I Cont. Gent., c.57 : Pot., q.1, a.3 を参照。
- (20) Geiger, op. cit., dialectique については ch. VI, XI, XIII を参照。
- (21) Garrigou-Lagrange. op. cit., p.311
- (22) I Sent., d.8, q.4. a.1, sed cujuslibet compositi esse dependet ex componentibus, quibus remotis, et esse compositi tollitur et secundum rem et secundum intellectum.
- (23) I Cont. Gent., c.22 Quod est per participationem alicujus, non potest esse primum ens.
- (24) Summ. theol., 1a, q.3, a.7 : Omne compositum causam habet : quae enim

secundum se diversa sunt, non conveniunt in aliquod unum nisi per aliquam causam adunantem ipsa.

- 25) I Cont. Gent., c.18 : Pot., q.7, a.1 et a.2, ad9 を参照。
- 26) Pot., q.3, a.5 : Illud quod est per alterum, reducitur sicut in causam ad illud quod est per se. Unde si esset unus calor per se existens, oporteret ipsum esse causam omnium calidorum, quae per modum participationis calorem habent. Est autem ponere aliquod ens quod est ipsum suum esse : quod ex hoc probatur, quia oportet esse aliquod primum ens quod sit actus purus, in quo nulla sit compositio. Unde oportet quod ab uno illo ente omnia alia sint, quaecumque non sunt suum esse, sed habent esse per modum participationis.その他, II Cont. Gent., c.15 : II Sent., d.37, q.1, a.2 を参照。
- 27) *ibid.*, loc. cit. ; I Sent., d.8, a.5, a.1 ; Geiger : *op. cit.*, p.160, note 2 を参照。bonum の制限の場合は Pot., q.7, a.1 を参照。
- 28) II Cont. Gent., c. 52, Geiger が主張するように聖トマスは esse と essentia の区別から ipsum esse subsistens の存在証明を試みているのではない。(*op. cit.*, p.204) しかし諸存在の esse の制限は, 可能態との合成によって説明される限り, 純粹現実態としての ipsum esse subsistens との対比に於てのみ言われることは明らかである。
- 29) Geiger, *op. cit.*, p.203 を参照。
- 30) Geiger, *op. cit.*, p.90 et 161
- 31) I Sent., d.43, q.1, a.1 Et ideo illud quod habet esse absolutum et nullo modo receptum in aliquo immo ipsemet est suum esse, illud est infinitum simpliciter ; et ideo essentia ejus infinita est, et bonitas ejus, et quidquid aliud de eo dicitur ; quia nihil eorum limitatur ad aliquid, sicut quod recipitur in aliquo limitatur ad capacitatem ejus.
- 32) Pot., q.3, a.5 : Oportet enim, si aliquid unum communiter in pluribus invenitur, quod ab aliqua una causa in illis causetur : non enim potest esse quod illud commune utrique ex se ipso conveniat, cum utrumque, secundum quod ipsum est, ab altero distinguatur ; et diversitas causarum diversos effectus producit. Cum ergo esse inveniatur omnibus rebus commune, quae secundum illud quod sunt, ad invicem distinctae sunt, oportet quod de necessitate eis non ex se ipsis, sed ab aliqua una causa esse attribuitur. Et ista videtur ratio Platonis, qui voluit, quod ante omnem multitudinem esset aliqua unitas non solum in numeris, sed etiam in rerum naturis.
- 33) In Boetii de Hebdomadibus, lect. I synopsis.
- 34) Geiger, *op. cit.*, p.47 を参照。
- 35) 註(1)を参照。perfectio の様々な意味に就ては Geiger, *op. cit.*, p.228, note 2 et p.251, note 2 を参照。
- 36) De anima, a.18 : …… talis est ordo rerum, ad invicem, ut quaecumque inveniuntur in inferiori natura, inveniuntur excellentius in superiori.
- 37) *ibid.*, a.9 ; Sed considerandum est quod secundum gradum formarum in perfectione essendi est etiam gradus earum in virtute operandi, …… Et ideo quanto aliqua forma est majoris perfectionis in dando esse, tanto etiam est

majoris virtutis in operando.

38 Spirit. creat., a.3 ; In virtutibus autem activis et operativis hoc invenitur quod quanto aliqua virtus est altior, tanto in se plura comprehendit, non composite, sed unite.

39 vita に関しては De anima, a.11, 認識に関しては ibid., a.18 を参照。

40 Summ. theol., 1a, q.79, a.4 ; Considerandum est quod supra animam intellectivam humanam necesse est ponere aliquem superiorem intellectum, a quo anima virtutem intelligendi obtineat. Semper enim quod participat aliquid, et quod est mobile, et quod est imperfectum, praeexigit ante se aliquid quod est per essentiam suam tale, et quod est immobile et perfectum.

41 ibid., loc. cit. : Anima autem humana intellectiva dicitur per participationem intellectualis virtutis : cujus signum est, quod non tota est intellectiva, sed secundum aliquam sui partem. Pertingit etiam ad intelligentiam veritatis cum quodam discursu et motu, arguendo. Habet etiam imperfectam intelligentiam : tum quia non omnia intelligit ; tum quia in his quae intelligit, de potentia procedit ad actum.

42 II Cont. Gent., c.46 : In omnibus decenter ordinatis habitudo secundorum ad ultima imitatur habitudinem primi ad omnia secunda et ultima, licet quandoque deficienter.

43 ibid., loc. cit. ; Ad hoc igitur quod universum creaturarum ultimam perfectionem consequatur, oportet creaturas ad suum redire principium. ibid. c.16 : Quod est in entibus primum, oportet esse causam eorum quae sunt.

44 Summ. theol., 1a, q.4, a.3 : Cum enim omne agens agat sibi simile in quantum est agens, agit autem unumquodque secundum suam formam, necesse est quod in effectu sit similitudo formae agentis.

45 I Sent., d.3, q.1, a.3 Cum creatura exemplariter procedat ab ipso Deo sicut a causa quodammodo simili per analogiam, ex creaturis potest in Deum deveniri tribus illis modis quibus dictum est, scilicet per causalitatem, remotionem, eminentiam.

46 II Cont. Gent., c.96 ; Sicut enim intelligibilia actu sunt absque loco, ita etiam sunt absque tempore.

47 I Sent., d.36, q.2, a.2 : Quidquid perfectionis in rebus est, hoc totum Deo secundum unum et idem indivisibile convenit, scilicet esse, vivere, et intelligere, et omnia hujusmodi. Pot., q.7, a.3 ; Cum Deus sit simpliciter perfectus comprehendit in se perfectiones omnium generum. I sent., d.34, q.3, a.2 ad 1 : Dicendum, secundum Dionysium, De div. nom., cap. IV, quod nihil divinae bonitatis omnino participatione caret ; et ideo ex rebus quantumcumque vilibus possunt sumi aliquae convenientes similitudines ad divina.

48 J. Maritain, op. cit., pp.82—90 を参照。

49 Geiger, op. cit., p.353 を参照。

50 Pot., q.5, a.3

51 I Sent., d.2, q.1, a.2 contra, 2.

52 I Sent., Prologus